

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	野間宏『青年の環』研究：大道出泉における転移関係の解消から革命主体の確立へ
Author(s)	尾西, 康充
Citation	国文学攷, 249 : 15 - 25
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051481">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051481</a>
Right	Copyright (c) 2021 by Author
Relation	



## 野間宏『青年の環』研究

### — 大道出泉における転移関係の解消から革命主体の確立へ —

尾 西 康 充

1

『青年の環』には田口吉喜による数々の悪事——大道出泉への恐喝や陽子のゴシップ記事、内山酒造再建事業に関わる利権入手などが暴き出される。田口の性格は「あらゆる悪計をもって、ひとをおとし入れ、ひとの秘密を握っては、その家に入り込み、しぼりとれるだけ、しぼりとり、その家をついに取りつぶすということ、自身の差別されてきた生涯の復讐をとげるのに憑かれて」いるとされる。出自を隠して生きている人びとから金品をゆすり取ることさえ厭わない田口を、大道は「部落のなかから生まれてくる反社会性」と呼ぶ。そして矢花正行に「君は部落のなかから生まれてくる反社会性というものを、その暗いものを徹底して知っているのか」と警告した（「炎の場所（二）」第六部第三章）。田口は、矢花が阪神間の人民戦線運動に関わっていたのを嗅ぎつけ、矢花が「部落の

なかを赤にしよう」と考えていると警察に密告し、ブレイガイドで闇チケットを販売していた矢花の母親よし江を恐喝することも企んでいたのである。

大道によれば、「人間は類的存在であるがゆえに、人を殺すことが出来る」のであり、「俺が田口を殺すことも出来るのや」と言い放つ。大道はこの「反社会性」を「革命」に結びつけ、「人、一人も殺さずして革命がなしとげられるとはどうしても考えられはしないよ」とし、「この反社会性を逆に梃子にして、運動を展開するということを考えぬ限り、それは真の力を発揮しえんやろう」と訴えた。

その反社会性こそは、また当然、資本主義社会を越えて行く重要な要素を、毒としてそのなかにふくんでいる。その反社会性は二重の反社会性であり、一つは本質的な反社会性、そしてもう一つは資本主義社会に対する反社会性であって、僕はこの二つのものを、運動のなかで分離することによって、その反社

会性を、資本主義社会を越えて行く要素として行きたいものと考えている。

大道は「本質的な反社会性」と「資本主義に対する反社会性」とを分離すべきだとし、後者を「資本主義社会を越えて行く要素」に転化させたいという。マルキシズムの強い影響を受けていた昭和初期、水平社運動は、経済的不平等を是正するために階級闘争を激発させ、社会主義革命を実現しようとしていた。黒川みどり氏は、自分たちを無産者に同化させ、無産者階級と一体化することによって差別を解消しようとしていた全水左派の考え方を、つぎのように説明している。

彼らは「部落民」と自らを位置づけながらも、彼らが重視しているのは被差別の立場にある「部落民」としての一体性ではなく、部落のなかの「貧乏人」であることだった。彼らは部落のなかの「少数の金力家」との間にこそ根本的な利害の対立を見出し、部落という枠組みを超えた「無産階級」に共通利害を見出していった。<sup>(1)</sup>

『青年の環』には、月三割という高利小口貸しによって勢力を維持してきた亀多田宗太郎と、大阪市の生業資金を役員名で借り受けて小口融資をはじめた経済更生会——靴、履物修繕業者組合——との抗争が描かれている。大正の米騒動では、大阪陸軍歩兵八連隊の兵士が帯剣、銃武装して市内に治安出動した経緯もあって、経済更

生会には、大阪府警のみならず陸軍憲兵隊の監視の目が光っていた。

矢花は、「反社会性」を「革命」に結びつけようとする大道に同調せず、それは大道の自殺を正当化する理論ではないといって、「ひとは類的存在であるがゆえに、ひとを殺すことは出来ない」のだし、田口を殺すこともできないのだと正反対の意見を陳べる。たとえ田口がどれほどひどい男であっても「部落の人間を裁くに正当な権利をもっているものは、一般の人間にはいない」というのである。これまで地域の人びとに接してきた矢花にとってみれば、人を殺すことではなく、「すでに過去の水平運動、部落解放運動によって自分が部落民であるという意識から全く解放されきっている人間」「平等観にこれほど徹しているひと」（島崎浪速区経済更生会長や京都の麻石）を手本にすることによって「反社会性」が克服できるのだと反論する。

事実、彼らのような指導者は、「吾等は人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向って突進す」という全国水平社綱領を体現していたとともに、地方行政が全国水平社に対抗して推進していた融和運動——「内部同胞の自覚向上を促し、共存共栄の実現を期す」とする内部自覚運動——とも接点を持つこともできたのである。

突然、黒鶏の時を告げる鳴き声がして、大道は田口との待ち合わせ場所に出かけようとする。矢花は彼を引きとめようとするのだが、自分の上司である大阪市役所社会部の池上福利係長から至急の電話

がかかってくる。別れの場面で大道は、矢花が触れたヘーゲルの『精神現象学 (Phänomenologie des Geistes)』の「動物のもっとも発達した器官は生殖器である」という言葉を、「もう一度、改めて考えてみることにするよ」と語ったうえで、矢花に向かってつぎのように話す。

しかしやはり俺は部落をまわってよかったと思うのや。この最低の、生きられるか生きられんかわかんような条件のところ、こう光りが、射しているとは俺にはとても思えなかったな。君はほんまに、よいところにいるのやな。ほんまによいところ。

この地域にもっと早く来るべきだった、と大道は繰り返しつつ歩き、矢花の生き方を承認する。そして、大道は意を決して田口のところに出かける。二度の中断をはさみながら二三年かけて執筆された『青年の環』は、このようにしてクライマックスに達するのだが、大道が「もう一度、改めて考えてみることにするよ」と語った『精神現象学』の言葉を手がかりに、この作品に登場する人びとの関係を読み解いてみよう。

## 2

「炎の場所 (二)」（第六部第三章）では、大道出泉は田口吉喜に死の制裁を加えた後、拳銃によって自殺する。田口を殺すことで「田

口に対する差別から脱げだし、田口と対等になれる」と考えていたからである。ヘーゲルにおける「生命」とは、個々の存在者を存在させる「個別の生命」であると同時に、それらの存在を廃棄することによって自己を維持させる「普遍的生命」でもある。個別を廃棄して全体として統一された存在は「類」と名づけられる。

ヘーゲルによれば、対象を自分のものにしようとするのが「欲望」であるとされ、それは対象を否定しようとする動きでもあるのだが、「欲望」が生じるのは対象がそこにあるからで、対象が存在しなければ「欲望」も生じない。人間の「自己意識」は、他者を否定しようとする「欲望」ではなく、「普遍的生命」の運動から生じるもので、「自己意識」によって自己と他者との相互承認が可能になるという。

自己意識に対して、ひとつの他の自己意識が存在する。つまり自己意識は、じぶんの外部に出ているわけである。この件には二重の意義がある。第一に、自己意識はみずから自身を喪失してしまっている。自己意識はじぶんを他の、ダステンデル実在として見いだすことになるからだ。第二に、自己意識はかくて他のものを廃棄している。自己意識はまた他者が実在であるとは見なさず、みずから自身を他のものの中にみとめるからである。<sup>2)</sup>

「自己意識」は、自己を否定して他者のうちに自己をみいだすと同時に、他者のうちに自己がみいだされることによって他者が否定され、弁証法的統一に至る。いささか乱暴な大道のロジックによれば

ば、他者としての田口を殺し、自殺という自己否定を企てることによつて、両者の間に生じていた矛盾が止揚される。亀井秀雄が指摘しているように、「田口を追及するというのは、けっきょく出泉にとつて、自分自身を狙うことでもある」。なぜなら「父親の財力と不始末に吸着していたかぎりにおいて出泉と田口の間柄は、むしろ事情をよく知らぬ矢花正行がそれなりに見抜いていたように、ヘーゲルの『現象学』に言う主と僕の関係のごときものであったのだから」といふ<sup>3</sup>。関西電力業界の重鎮である大道敬一は、電力統制の機運に乗じて新しい国策会社の経営に乗り出そうとしていた。その恩恵に与つて世を渡つてきたのが出泉であつたのだから、出泉にとつて、敬一の不始末につけ入ろうとする田口を断罪しようとするのは、「忠実な友」であつたはずの田口との関係を根本的に見直さざるを得なくなるだけでなく、みずからの不甲斐なさを正視せずにはいられなくなるのである。

「ヘーゲルの主と奴、主人と奴隷の関係」は、「重心」（第六部第一章）で矢花が言及したヘーゲル哲学の核心である。『精神現象学』によれば、『承認をめぐる生死を賭した闘争』が主人と奴隷の間で生じ、「他者の死をめざすことのうちには、みずからの生命を賭すことがふくまれている」<sup>3</sup>。人間が真に自由で自立的な存在であるためには、他者からの承認が不可欠である。奴隷は労働を通して事物を加工し、自己を形成することができるが、主人は消費に没頭す

るだけで労働による自己形成ができない。その結果、主人の生活は奴隷に依存したものに墮してしまふ。奴隷が自由と自立を獲得するようになるのに対し、逆に主人はそれらを喪失するだけになる。秘密を握られた大道が田口にとらわれてゆくのに対し、悪事を自在におこなう田口は大道を脅かすまでになっており、主人と奴隷の地位が逆転したかのようにみえてくるのであつた。

大道は自己の「腐敗の哲学」に触れながら、「羞恥する場所、それは人間の汚穢物を排泄する場所に、隣りあわせにあるわけで、俺はこの羞恥の場所と汚穢の場所を、いまでは誰よりも鋭敏に感じとることが出来る人間になれた」といふ。大道の言葉を聞いて矢花は、「動物のもつとも発達した器官は生殖器である」と語つたのだが、生殖器と排泄器官の接合は、『精神現象学』V「理性の確信と真理」（A「観察する理性」）の末尾に「無限判断」の説明として使われている。

そこには深みと無知（知られていないこと）との結合があり、その結合は高きものと低きものとの結合とひとしい。そのような結合なら、生けるものにかんして自然が、その最高の完成の器官つまり生殖器と、放尿の器官とを結合したことに於いて、むぞうさに表現しているところである。無限判断は無限なものとしては、じぶん自身を把握する生命の完成ということになるだろう。意識は、それが生命の意識であるにしても、表象のう

ちにとどまったままであるならば、しかしながら放尿めいたふるまいを示すだけなのである。<sup>5)</sup>

生殖と排尿とは本来異なる機能であるが、それらを同一の器官が担っている。排尿という個体維持のための低次の機能を通らなければ、生殖という普遍的な価値のある高次の機能を持つことはできない。ヘーゲルにおける「無限判断」とは、まったくかけ離れた二つのものが、その徹底した否定性ゆえに結びつけられた判断形式である。「精神とは骨である」という命題に示されるように、そこに貫かれているのは、主語と述語の間に共通する普遍の領域がなく、比較することも区別することもできないという徹底した否定性とされるのである。

スラヴォイ・ジジエックによれば、旧来の封建的秩序を打ち破き、近代国家の新しい合理的秩序を形成するためには、ヘーゲルの「無限判断」にみられるような「ラディカルな抽象的否定性」が必要であった。<sup>6)</sup>ジジエックはそれを「革命的テロリズム」を呼び、「主体の無限の権利」の不可避的主張——「具体的普遍」への道はただ、「抽象的否定性」の十全なる主張を経なければならぬ——を強調したことよって「ヘーゲルがヘーゲルになった」と断言する。<sup>7)</sup>この「ラディカルな抽象的否定性」は大道の主張、すなわち「反社会性」を「逆に梃子にして、運動を展開する」とした「革命」理論と同時に、「腐敗、腐敗、くされやぶれる、そのなかに自分を置いて生きて行くの

や」という「腐敗の哲学」にもつながる。『精神現象学』Ⅷ「絶対知」の末尾には、つぎのような表現がある。

じぶんのうちへ立ちかえることで精神は、みずからの自己意識という闇夜のなかに沈みこんでしまうけれども、精神にとっては消失してしまった現存在はたほう、その「想起という」夜の闇のなかで保存されている。特定の定在はこのように廃棄されるが、その定在こそ——以前に現存在に存在したものとはいえず、知ららたらに生まれてそこにあるものでもある——あらたな現存在であり、あたらしい世界であって、精神の更新された形態なのである。<sup>8)</sup>

ヘーゲルにおける「闇」「夜」は否定性を意味する。否定の徹底を媒介させながら新しい生成をたゆみなく誘発することによって「精神の無限性」に達するというのである。ジフィリス菌（梅毒）に身体を冒された大道は、「しかし君はじつにうらやましい男だよ。うらやましいよ。健全だよ、そして昼だよ。真昼だと言ってもよい」と矢花正行に語りかける。翻って自分自身に触れ、「君とは反対に病気持ちで、真夜中の人間がいるということ、一歩一歩積み重ねて行くというのではなく、跳び上り、そしてまた跳び降りして歩いて行くような人間がいるということが、君の眼には入っていないのだよ」と訴えた。

大道が使った昼と夜の喩えは、『精神現象学』でも使われている。

「絶対的な実体である精神」の「転換点において意識は、感覚的此岸という彩られた仮象、超感覚的彼岸という空虚な夜から脱出して、現在という精神の白昼へと歩みいつている。」<sup>9)</sup> 時を忘れて昼の日中に鳴く黒鶏の声をきっかけに、大道は「腐敗の哲学」——「空虚な夜」からの脱出を図って、ヘーゲルのいう「私たちである〈私〉であり、〈私〉である私たち」である「状態への止揚を目指したのであった」<sup>10)</sup>。

### 3

「華やかな色彩」(第一部第一章)では、かつての恋人・大道陽子  
が矢花正行に「京都の事件」を知らせる。矢花の友人たちは「人民  
戦線事件のしばらく後で、それとは別個に学生運動、その他の部  
面  
で昨年検査され、不起訴処分が出てきていた」(「美しい夜の魂」第  
二部第一章)。歴史上の事実を時系列に沿って説明すれば、第一次  
人民戦線事件(一九三七年一月)、第二次事件(三八年二月)、日  
本共産主義団事件(三八年九月)と一斉検査がつづくなかで、雑誌  
「学生評論」関係者として永島孝雄が逮捕され(三八年六月)、京大  
ケルン関係者として布施杜夫が逮捕された(三八年九月)。この時  
期はまさに『青年の環』の時代設定に重なる。

『青年の環』冒頭から矢花は「京都の事件」にいきなり巻き込まれ、  
作品の結末部分に至るまで特高警察による捜査が自分の身まで及ば  
ないかを恐れつつける。ジジエックによれば、「主体は、彼が知って

いるべきことをすでに知っているかのように扱われる状況へといき  
なり放り込まれることによって、告発されるのだ」という。<sup>11)</sup>「炎の  
場所(一)」では、中淀区経済更生会の会計帳簿を調べにきた二人  
の警官に対し、思想犯の「正体」を見破られないように、矢花は言  
葉や調子、言い回しなど相手に同調させることを忘れなかった。ち  
なみに中淀区は架空の場所である。作品には崇禪寺駅が登場するが、  
経済更生会が実際に設立されていたのは、東淀川区、東淀川区北部、  
東淀川区日之出町の三か所であった——角岡伸彦『ヒストルと荊冠』  
(二〇一二年一〇月、講談社)は、現代における「部落のなかから  
生れてくる反社会性」を、『青年の環』の舞台と重なる場所で追及  
したルポルタージュである。「部落解放運動や同和対策事業は何を  
残してきたのか?」という視点から、東淀川区の部落解放同盟をめ  
ぐって発生した飛鳥会事件が取り上げられている。

他方大道出家は、過去の対象関係を強迫的に反復させている。「暗  
い色をつけた炎が彼の内にさし込んで来た」と、明/暗が相剋する  
「炎」に喩えられた「それ」「そいつ」が大道の焦燥感をかき立てる  
のであった(「炎に追われて」第一部第一章)。

「炎に追われて」には、大道が佐々木三郎と連れ立って、梅田新  
道の喫茶店を出て御堂筋沿いに歩く場面がある。堂島ビル(通称…  
堂ビル)の前を通して、大阪市庁舎北側の堂島川に架かる大江橋に  
さしかかると、「それ」「そいつ」が大道の脳裏を過ぎる。「ぱっと



心の内を光りのように照らしながら、何ものかが通る。重量のあるものが、彼の身の隅々を重くする。そして「彼の熱の意識のなかに動く、そのつ、のさらに向う、彼の心のさらに深い暗みの中から、一人の男の顔」が浮かび上がってくるのだが、その「男の顔」こそ、市役所最上階の五階にある社会部に勤務している矢花であった。「幾度その矢花の風態を見下げたことだろう」という過去の記憶をよみがえらせながら、大道は「奴はどこか汚れてやがる、奴の体のどこかに卑しさがくっついている」と矢花の幻影を突き放そうとする。

矢花が第三高等学校の学生であったとき、彼にマルキシズムの運動を教えたのは、左翼学生運動に没頭していた大道であった。しかし、矢花はそれを素直に受け入れず、運動の正しさを疑っていた。大道には、矢花がいかに愚鈍であるという印象に加えて、「父の下役の息子の正行の姿は、じつさいうすぎたないのろろした格好」にしかみえなかった。だが『青年の環』が進むにつれて、その「汚れ」や「卑しさ」が実は、大道が自分自身の「汚れ」や「卑しさ」を矢花に投影したものにすぎなかったことが明らかになる。大道にとっての矢花は、自己を想像的同一化する転移関係にあったといえる。

矢花が三高に入学したのは、「あの大きな学校ストライキが起った二年あと」とされる。大道は「あれは俺が、大学にはいったときのことだ」と回想しているので、両者は三学年差と設定されている。

滝川幸辰教授が文部省から休職処分を受けた滝川事件は、一九三三

年五月に発生した。その二年後に入学したのであれば、大道と矢花の出会いはい三五年四月頃になる。三五年四月はちょうど野間宏が京都帝大文学部に入学した年に当たる。その一方、大道と矢花が出会ったのは「小林多喜二の死が果たえられてしばらくしてからのことであった」とされているのだが、築地警察署で多喜二が虐殺されたのは三三年二月であることから、作品中の矢花の入学年に二年間の齟齬が生じているといわざるを得ない。

滝川事件が起こると、学問の自由を侵すものだと京都帝大法学部教授は総辞職し、助教授や講師、助手もそれに同調した。学生も抗議運動に影響され、全学学生代表者会議や全学学生中央部会などの中央指導部を結成し、他の帝国大学の学生自治会に決起を呼びかけた。日本共産同盟京大細胞は一九三三年六月一〇日に結成され、機関誌「京大学生新聞」を二回にわたって学内に撒布したが、六月二〇日京都府警特高課によって一斉検挙されてしまう。この年、京都帝大では五四名の学生が検挙され六名が起訴に至るとともに、五名が放校、六名が退学、一五名が停学、二名が訓戒処分を受けている。「裏と表と裏（一）」（第六部第一章）には、大道が外国語の勉強のために京都に下宿していた時期に発生した「思想事件」で、大道敬一は「府庁の内務関係に手を廻して、処分を不起訴処分」にしろもらったとある。

三高を中途退学後に阪急百貨店宣伝部に勤めていた大道が特高警



察に連行された記憶——「私服をつけた鼻の低い一人の刑事につれられて歩いて行ったときの姿」——を呼び覚ます(「炎に追われて」)。堂島ビルと堂島川との間にある「細い道」の先には、大阪地裁や大阪高裁(控訴院)、大阪府天満警察署などの法執行機関が集まっていた。運動から離れてしまうことになった経緯を、大道は矢花に話していない。大道は矢花との対話を空想しつつ、自分が「解るはずはない。俺はまだお前に何一つ話していないんだから……」という、空想上の矢花は「解るよ。……別に、お前が話してくれなくとも、お前のさがしているものくらい……」と応える。大道の声に耳を傾ける矢花の瞳の奥には、彼に理解してもらおうとして話しかける大道の姿が映っていたのである。井上隆史氏によれば、大道が抱く幻覚は「梅毒による幻覚症状」によるものだが、「総合された読者の視点」に立てば、長編作品の全体を貫くイメージの連関が感受できるのだという。<sup>12)</sup>

思想弾圧が波及してくる恐れを感じつつも、経済更生会の支援にのめり込んでいる矢花の姿は、検挙の危険が迫るなか、救援カンパに奔走していた三高時代の大道に遡行できる——「彼の前にはいまは全くその位置を変えて矢花正行が立っているかのようである」(「炎に追われて」)。大道が過去への遡行を繰り返しながら、これからはじめる社会革命の遂行的な認識を抱くようになるのが『青年の環』における弁証法的プロセスであるといえよう。

大道は矢花に「どうやら俺は君に会うのが遅すぎたという気がする。もう一日早ければよかったのに、といま考えているところなのや。いや、早すぎたのかも知れん、もう一日、遅ければよかったのかも知れん」と告白する。ここに典型的にみられる「適時」であることの構造的不可可能性——「「いまだなお」を「つねにすでに」へ転倒する形式、「早すぎ」を「事後的」へと転倒する形式」の反復を通じて「それ自身」へと止揚するもの——こそ、『青年の環』の壮大なドラマを形成する弁証法的プロセスである。<sup>13)</sup>

弁証法についていえば、野間、サルトルが「実践的開示による世界把握と創造行為の関係」を取り扱わなかったと批判し、「作家が実践を通して把握した世界の、欠如している全体を想像力をもって得ようとする」ところに文学における構想の世界があるという独特の持論を展開していた。<sup>14)</sup>

「ひとつ大爆発でもやらんといかんのやろな」(「血とつながり」第二部第二章)といって大道家の転覆を企てようとしていた大道と、「爆発せんのかな」。爆発せんのかな(「舞台の顔」第三部第一章)と蜂起を待望していた矢花との間には、権威や秩序の解体を志向する点では通底する。しかし、「爆発」への関わり方には大きな違いが存していた。大道はみずから革命の主体になろうとしていたのに対し、矢花は革命の協力者にすぎない。<sup>15)</sup>『青年の環』の掉尾を飾る「炎の場所(三)」(第六部第三章)は、カンテキを並べて米を炊

くという奇抜な戦術を採用し、警官隊の介入を警戒しながら亀多田派と対峙する、中淀区経済更生会メンバーの獅子奮迅の活躍ぶりが描かれているが、そこでも安河や島崎、山森たちが主役であって矢花は脇役でしかない。『青年の環』における革命の眞の主体は、「部落のなから生まれてくる反社会性」を断罪しようとした大道から生まれるのであった。

そこで、「俺はどうして、もっと前から行かんだのかと、ほんまにくやしい思いをさせられたよ」（「炎の場所（一）」）という大道の発言に着目し、大道が矢花との間にみられた転移関係を解消させ、眞の主体を形成させたプロセスを分析してみよう。

#### 4

喜田貞吉は、『所謂融和問題に於ける部落の史的研究』に取り組んだ歴史学者であった。喜田が一九三九年七月二三日に死去すると、三好伊平次（黙軒）の「国史界の権威／融和事業の偉勲者／喜田博士の逝去を傷む」という追悼記事が『融和時報』第一五三号（一九三九年八月）に掲載された。喜田は全水左派とはちがって、融和事業による集団的・漸次的生活改善と、個人の努力による立身出世の機会保障とを通じて、差別が解消できると考えていた。身分的上昇と下降が起り得るといふ身分移動の動的プロセスこそ日本民族融合のプロセスであり、天皇一族といえどもこの動向とは無縁ではないと

大胆に論じたのである。奇しくも喜田の死は、『青年の環』の時代設定に重なっていた。

“同和”という言葉が使われるようになったのは、一九四一年六月に中央融和事業協会の後継団体として発足した同和奉公会や、翌四二年八月に文部省が公開した『国民同和への道』にもとづく同和教育など、「高度国防国家」の建設を目指した太平洋戦争の総力戦体制下であった。その傾向は、日中戦争勃発時からすでに顕著になっていたのだが、水平社運動は“無産者との一体化”から転じて“国民との一体化”を目指して戦争協力をおこなうようになっていたのである。

だが、そもそも不当な差別が続いてきたのはなぜだろうか。ユダヤ人差別と類推して考えれば、ヨーロッパ人がユダヤ人を差別するのは、実際のユダヤ人とは何の関係もない。ユダヤ人は、他のヨーロッパ人を経済的に搾取しているとか、時おり娘を誘惑するとか、定期的な風呂に入らない者がいるとか、さまざまな偏見が持たれているが、それらを一つひとつ実証的に論破したところで差別は解消しない。“部落民”に対する差別の原因は身分差にあるのか、経済的不平等にあるのか——実は、それらの原因が取り除かれたとしても差別は解消されないのではないか。ジジエクによれば、「イデオロギー的」な民衆の姿は、「われわれ自身のイデオロギー体系の結びを繕うためのもの」でしかない。<sup>16</sup> すなわち“部落民”に対する差

別は「単一民族国家」のイデオロギーがその内部で抱える矛盾——  
「均質な国民」を担保するためには、つねにその内部からはじきだ  
される存在を必要とする——に起因しているといえるのではない  
か。

大道は矢花に向かって「俺はどうして、もっと前から行かなんだ  
のかと、ほんまにくやしい思いをさせられたよ」と語り、「これは、  
ほんとうのところを言うてるのやぜ。そう、俺の、心の底からぐっ  
とのぼってくる言葉そのままやで」という。学生時代から革命を志  
した大道は、矢花が関わっている地域に足を踏み入れることによっ  
て、それまで目撃したことのない社会的矛盾を目の当たりにした。  
父親の地位と財産に寄生している大道は、自分が社会変革の志から  
背を向けてしまったと感じていたが、実はその志自体、裕福な家庭  
に育ったインテリ学生のご想像であって、真の抵抗精神を一度も抱い  
たことがなかったのではないか。革命を必要としている人びとが、「こ  
れほどすさまじい、ひどい条件のところ」に置かれていたとは解らん  
かったな」という言葉のなかに、そのような大道の真意が託されて  
いると思われるのだが、それと同時に、彼は「この最低の、生きら  
れるか生きられんかわからんような条件のところ」に、こう光りが、  
射しているとは俺にはとても思えなかったな」といってそこに「光」  
を発見している。転向によって、そして病気によって生きる希望を  
失ったと思っていた大道にとって、この「光」は彼がそれまで抱い

たことのない理想でもあった。再びジジエックによれば、「自身  
が失ったものを自身が一度も所有したことがなかったという体験、  
これこそ、精神分析の終結の瞬間の、つまりは転移からの出口の十  
分に厳密な定義と考えることができるだろう」とされる。<sup>15</sup> 大道は転  
向体験に固着するあまり、矢花を否定することでしか自我を防衛で  
きなかつたのだが、「同じ道を歩いて」いるようにみえた両者が実  
は「まったく別の道を歩いている」のを認めることを通じて、よう  
やく転移関係からの出口を発見するに至ったのである。

たしかに俺と君とは同じ道をたどってきたよ。しかしもとも  
と二人は同じ道を通りながら、別々の道を歩いていたようなも  
のやないか。いや、それはいまも同じことで、いまも二人は同  
じ道を歩いているのかも知れんよ。そう、そうして、それでい  
てからが、まったく別の道を歩いているということになる。

磯貝治良氏は大道を《転向者》と呼ぶことに異議を唱えた。父親  
に対する彼の要求——「内山酒造再建の汚れた計画から手を引け、  
関西電力界の実力者という現在の地位から退け、腐臭が立ちこめ  
る（ブルジョア階級の家庭としての）大道家を崩壊させてしまえ」  
——などは彼にとって「体制的なものへの向日的とさえいえる異議  
申し立てであり、闘争宣言」であったとし、磯貝は大道の「正義」  
の情熱「がそこに見出せるとしたのであった」<sup>16</sup>。

大道にとって「忠実な友」であったはずの田口が、実は「復讐」

に憑かれた人間であった。大道は、敬一と田口との共謀関係に巻き込まれていたことを後から知ったのだが、田口との悪しき因縁は自分気がづく前からすでに存在していたのである。『青年の環』のクライマックスにおいて、田口という《反社会性》を体現した人間に対する認識を媒介にして大道は、ついに真の主体を形成することができたのであった。

注 『青年の環』の本文は、岩波文庫版に拠った。なお本文中には、今日では使用しない差別的な言葉が含まれているが、当時の社会背景を知るために、学術的な観点から原文のまま引用した。

- (1) 黒川みどり『地域史のなかの部落問題―近代三重の場合』(二〇〇三年三月、解放出版社、一八七―一八八頁)
- (2) ヘーゲル『精神現象学』上(熊野純彦訳、二〇一八年二月、ちくま学芸文庫、二九八―二九九頁)
- (3) 亀井秀雄『青年の環』の結び目(『群像』第二六巻第七号、一九七二年七月)、引用は植谷雄高『青年の環』論集(一九七四年三月、河出書房新社、一〇六頁)からおこなった。
- (4) 前掲(2)、三〇四頁。
- (5) 前掲(2)、五四〇頁。
- (6) スラヴォイ・ジジエク「ヘーゲルの『具体的普遍』とは何か」(天橋良介『下伊ツ観念論を学ぶ人のために』、二〇〇六年一月、世界思想社、二九七頁)
- (7) 同右、二九八―二九九頁。
- (8) ヘーゲル『精神現象学』下(熊野純彦訳、二〇一八年二月、ちくま学芸文庫、五八九頁)

(9) 前掲(2)、二九七頁。

(10) 同右

(11) スラヴォイ・ジジエク『イデオロギーの崇高な対象』(鈴木晶訳、二〇一五年八月、河出文庫、三三七頁)

(12) 井上隆史『三島由紀夫『豊饒の海』VS野間宏『青年の環』―戦後文学と全体小説』(二〇一五年一月、新典社、九四―九六頁)

(13) スラヴォイ・ジジエク『もっとも崇高なヒステリー者―ラカンと読むヘーゲル』(鈴木國文他訳、二〇一六年三月、みすず書房、一七六頁)

(14) 野間宏『サルトル論』(一九六八年二月、河出書房新社、引用は『野間安全集』第一九巻(一九七〇年七月、筑摩書房、二二二頁)

(15) 土方鉄は「また現実の野間も、この作中の矢花も、「部落解放運動に献身した」とは、どのように拡張解釈しても不可能である」と指摘している(『田口吉喜のイメージ』(前掲(3)、一四九頁))。

(16) 同右、九七頁。

(17) 前掲(13)、一〇四頁。

(18) 磯貝治良「求心力としての部落「炎の場所」の構造」野間宏『青年の環』小論(『新日本文学』第三六〇号、一九七七年八月、八四―九三頁)

―おにし・やすみつ、三重大学理事・副学長―